

施設利用と住民組織 (その3)

阿部 和枝・小林 昭子

(宮城県農業センター)

The Relation between the Utilization of the Public Hall
and the Organization of the Inhabitants, Part 3.

Kazuo ABE and Akiko KOBAYASHI

(Miyagi Prefectural Agricultural Research Center)

は し が き

この報告はその2に引き続き地域圏の意味をコミュニティ施設利用状況の分析を通じて考察しようとしたものである。

施設にはそれぞれその設置意図があり、これに即応してその利用内容や対象を予じめ想定しつつ建設される。この報告では旧村レベルの施設としてコミュニティセンター、部落レベルの施設として生活センターを取りあげているが、この場合でいえば、コミュニティセンターは事業主体が町村であり、旧村のセンターとして位置付けるとともに地区公民館としての機能をもたせていることから、その利用は旧村の範囲が中心になろうし、生活センターは部落が事業主体であり、金も土地も労力も部落が出して建設していることから、その利用は部落が中心になると思われる。その実態について、宮城県中田町浅水地区、中新田町鳴瀬地区の事例で報告する。

研 究 方 法

調査対象施設は、旧村レベルでは中田町浅水コミュニティセンター、中新田町鳴瀬コミュニティセンター、部落レベルでは中田町浅水巻生活センター、中新田町平柳生活センターである。

分析資料としては、それぞれの施設の一年分の利用日誌を用いた。

分析の視点としては①利用量②利用者の地域範囲③利用者の性格の三点に絞った。利用者の地域範囲は、利用者がどの地域範囲に属して利用しているかをみようとしたものであり、大きくは地区内利用と広域利用の二つに分け、地区内利用を更に旧村を範囲として組織されている諸集団、部落、個人に細分した。利用者の性格は、利用者がどのような属性をもっているかをみようとしたものであり、①住民による諸組織集団②公的機関③各種協議会④個人⑤その他に分類した。

1. コミュニティセンターの利用実態

浅水コミュニティセンターの利用量は年848件、月当たり71件もあり、非常に利用の多い施設である。利用者の地域

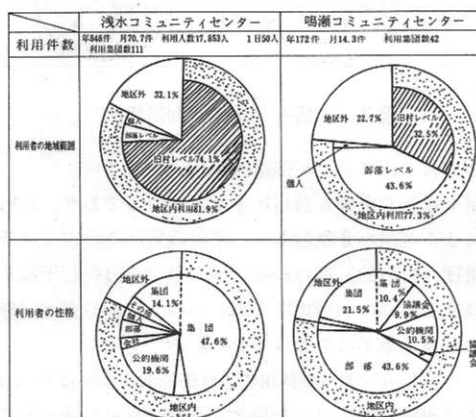


図1 コミュニティセンター利用状況

範囲は地区内が多くなかでも旧村を範囲とするものが3/4をも占めている。利用者については、集団による利用が多くなかでも旧村を組織範囲とする諸集団の利用がめだち全体の半分になっている。この集団の内容は青年会、婦人会、老人クラブ等の年令集団、おどり、民謡、釣、音楽などの趣味的同好集団であり、1集団当りの利用回数も多い。

鳴瀬コミュニティセンターについては、利用量は年172件で浅水の1/5弱になっている。利用者の地域範囲は、浅水に比べると、旧村レベルのものが非常に少なく3割にとどまっている。これに対して部落レベルの利用が多い。利用者を見ると、旧村を組織範囲とする集団の利用は1割しかない。集団数も少なく、1集団当りの利用量も老人クラブを除くと1~2回にとどまっている。

同じ旧村レベルの施設でも、浅水の場合と鳴瀬の場合では、その利用の様子は量的にも質的にも違っている。

2. 生活センターの利用実態

浅水巻生活センターは年間94件の利用があり、昨年の生活センター調査(その1で報告)の平均利用回数92回とほぼ同程度の利用となっている。利用者の地域範囲は部落内が100%である。これに対して平柳生活センターは179件と巻に比べて約倍の利用があり、利用者の地域範囲は地区

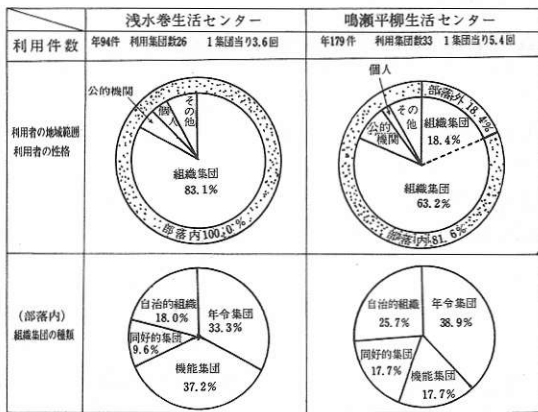


図2 生活センターの利用状況

外が2割含まれているが部落内が圧倒的に多い。

利用者は巻も平柳も利用比率はほぼ同じであり、諸組織集団による利用が8割強ある。諸組織集団の内容をみると年令集団、自治的組織の利用比率は平柳の方が若干高く、巻では機能集団の利用比率が高いのに、平柳の方は同好的集団の利用比率が高くなっている。

二つの生活センターの利用のされ方をおまかにみれば、部落内諸組織集団による利用という点においてほぼ同じような傾向をもちながら、平柳の方が利用量も利用集団数も1集団当り利用量も多く、部落内諸組織集団の活動が活発

な様子を見ることができる。

3. 施設利用と住民組織

中田町浅水、中新田町鳴瀬の2地区における施設利用の実態を総括すると、浅水においては、旧村レベルの施設における利用が活発で、その内容も旧村を組織範囲とする集団の利用が目立つが部落レベルの施設利用にはそれ程目立った動きがない。これに対して鳴瀬の場合、旧村レベルの施設利用が少なくしかも旧村を組織範囲とする集団の利用が非常に少ない。しかし部落レベルの施設利用は多くその中味も部落内諸組織集団による利用である。

2地区におけるこのような施設利用の違いは、その2で報告した住民活動に対応している。すなわち浅水においては兼業化にともない部落内組織集団の活動は沈滞し住民活動の足場がより広域な範囲に移っているのに対して、鳴瀬の場合は農業が展開しており、組織集団が部落内にその活動の根をおろしている。

ま と め

コミュニティ施設における利用者はその施設の地域範囲に組織の母体をおく集団が主となる。このためこの範囲における諸組織集団が実体をともなった時その施設の利用度は高くなり、逆の場合は利用度がさがるといえよう。施設計画においては、施設効率という施設側から要求が先になりがちであるが、利用主体が実体をもつ地域範囲に施設配置を考えることが大切である。